

能〈竹雪〉の改訂上演

村上 湛 (田村良平)*

一般に知られていないことだが、能の「台本」というものは、実は存在しない。

「台本」の定義とは、演劇畑の常識で言えば、「セリフ」に加えて「ト書き」の完備された、実演のよりどころとなる定本であろう。「ト書き」とは簡単な演技演出指定であり、それなくして「セリフ」だけでは演劇は成り立たない。実地に演出家の指示などは別途伴うにもせよ、近代劇の通念では「台本」あつての演劇である。

ところで、能の世界で「台本」に通ずる役割を果たすものは、セリフ部分と歌謡部分とを含む詞章に、^{せりふ}節付(声楽譜)を伴った、いわゆる謡本である。藝事の伝授と不即不離だった昔は、謡本は詞章・節付併せて自ら書写する、あるいは師伝とともに授けてもらうものだった。現代では一般に市販されており、これを玄人も素人も同じく使用する。

謡本は、現代では流儀(主にシテ方五流)の宗家・家元によって独占頒布されている。これには元々、「ト書き」に類するものは記述されな

いのが例であり、現在もそれは基本的に変わらない。一種の読者サーヴイスとして、それに類する記事が付記されていても、実演に益する本当の演技・演出書は「型付」(略称「ツケ」と称して、宗家・家元、またはそれに準ずる家の独占状態にある。「ツケ」なくして謡本だけで能を演ずることは不可能である。

いま述べた通り「ツケ」は宗家・家元の厳重な管理下に置かれているから、たとえば、自分の父が能役者で、時の家元から詳細な「ツケ」を書き写させてもらっているにしても、子である役者が流内で相応の立場になければ、父所持の「ツケ」に基づいて能を演ずることは、慣例上許されない。同じものでもやはり、新規に家元・宗家から下付されるのが筋なのだ。いわば「ツケ」は、家元・宗家の権威を支える最重要の装置の一つであつて、能の、特に現代に生きている能の、演技研究・演出研究に困難が伴うのは、実にこの点である。

能楽界内部からの逸出文書として公的機関に収蔵された資料を除き、現在諸流で実用に付される「ツケ」は、簡単に参照できるシロモノではない。宗家・家元と個人的に親しい者であっても、外部の人間がその提供を軽々しく願える態のものではない。したがって、本格的に研究・鑑賞しようと思う者は、おのずから自分で舞台上に接し、耳目をもって自分の「ツケ」を作成しなければならぬだろう。

プロの世界でも事情は類似する。能の型には常の演式と、替エや小書と称する特別の異式とがあつて、後者は年功を積むことによつて初めて演ずることが許される。「ツケ」の披見が許されるのは、原則として自らその能を演ずることが決まって初めてであるから、実演の予定がない者が将来に備えてという理由で事前に「ツケ」を複製して貰えることは、通常決してない。ただし、実地に見聞きして覚えてしまうことは、自ら

演ずる演じないは別として、むしろ能役者たちに推奨される藝道上の心得でもある。見覚えたものは筆記に残すであろうから、ここに自分流の手控えが残り、これまた時代が経つと宗家・家元公認の「ツケ」と同格の権威を發揮しないものでもない。

だが、いわゆる「遠い曲」、すなわちめったに出されない珍曲・稀曲の類は、見聞きし覚えることのできないことが多く、その場合ははじめから「ツケ」を参考にしないと上演は不可能である。またこうした曲は、一度手がけても将来再演するかどうか分からないから、時々の工夫を凝らすことなく、まず一応は「ツケ」通りに演じて事足りりとなることも多い。これは、普段しばしば舞台上に掛けられて演ずる回数が多い演目だと、それが許される立場の役者であればあえて「ツケ」を踏み越える自在な演技・演出を試みることがあることと、実に対照的といえる。したがって、「遠い曲」ほど、能の型は固定化の一途をたどり、その演出の意図が問われないで温存される、むしろ退化しつつも放置される傾向が強いのである。

今回わたくしが補綴を手掛けた能〈竹雪〉^{たけゆき}は、現在ではシテ方三流派にのみ残された稀曲である。それでも、能としてより謡曲としての魅力のためか、宝生流では折々出されるが、金剛流では廃曲同然。参考曲の扱いで宙に浮いていた喜多流では平成八年（一九九六年）一月十九日、国立能楽堂第二八五回定例公演として上演されている（シテ・友枝昭世）。その時は堂本正樹・小田幸子両氏の演出再考により、たとえば金剛流に做って後場「カケリ」を挿入するなど、喜多流のみならず他流の演出も参考に取り入れた改訂版だった。わたくしが実地に見た印象ではかなり長大で、全体七十二分という所要時間はもっと詰められると思っ

ていた。

堂本氏には「宝生流の『竹雪』再生法」という一文がある（『現代能楽』四号・一九八七年三月。のちに『喝食抄』に採録）。国立能楽堂版は、この発想に基づく試演だった。同文中に言うようにそれまで〈竹雪〉に関しては満足な考察がなく、二十年以上経た現在も状況は変わっていない。わたくしが試みた今回の上演版については、既に『能楽タイムズ』平成二十年四月号に報告文を執筆したが、紙数の関係で意を尽くせなかった。したがって、ここにある程度仔細な報告を試みるのも、能楽演出史の上であながち無意味なことではないだろう。

平成二十年二月九日、新潟市民芸術文化会館（りゅうとびあ）能楽堂で「雪見能」と銘打つ公演が持たれた。本格的な常設能舞台のある当所だが、地方の現実として集客に困難が伴うため、能・狂言の定期公演は年間計画されていない。この舞台第一の特色は、鏡板を横に引き開けるとガラス張りとなって竹の植え込みが見通せる仕様になっていることである。今回の冒頭講演を勤めた歌人・馬場あき子女史の発案で、「雪の降る時期に、竹藪の雪を見通しつつ、能〈竹雪〉を見せよう」というのが、今次公演のひとつの趣向であった。そもそも〈竹雪〉は、越後の国を舞台とした能なのだ。当日は同じく雪を趣向とした狂言の名作〈木六駄〉（シテ・山本東次郎）と番組配合も良く、積雪は少なかつたものの、満席の盛況であった。

能〈竹雪〉のあらずじを、簡単に記しておこう。

直井左衛門（ワキ・宝生閑）は先妻を離別（ただし能の中にその理由は明記されない）。嫡子たる兄・月若（子方・友枝雄太郎）を自分が引き取り、妹（子方・岡見真希）は長松の在所に隠れ住む先妻の母

(シテ・塩津哲生)が育んでゐる。直井が寺参りで留守の間、月若は母恋しさのあまり長松を訪ねる。団欒も東の間、本宅から迎えの下人(アイ・山本則秀)が来訪、月若は帰宅するが、長松に行っていたことを継母(アイ・山本則重)に責められ、庭囲いの竹に降り積もる雪を払う罰を与えられた揚句、家から閉め出され、凍死してしまう。凶報が長松に至り、母と妹とが駆け付け月若の遺骸を掘り出し嘆くところに直井が帰宅。自らの不明を恥じる。と、両親の嘆きが天に通じ、虚空に竹林の七賢の音が響く。その利益によって月若は蘇生。喜びのうちに両親は復縁し、親子ともども直井の家は末代まで栄えた。

地謡・囃子方が座に着くと、喜多流の〈竹雪〉ではシテは出シ置キが定めである。これだと舞台空間が雑然とするので改め、間狂言・継母を出シ置キにした。こうなると前場では、本舞台Ⅱ直井家、橋掛リⅡ長松の家、くっきりとした対比が出、人物の出入りに無駄な時間も掛からない。

月若が面会を求めると、前シテ・直井の先妻が子方を先立てて暮から出る。前述の如く喜多流の常の型ではシテは出シ置キで、月若の来訪に先立ち「このほどは松吹く風も淋しくて。伴なふ物は月の影。人も訪ひ来ぬ隠れがの。柴のとぼその明け暮れは。いつまで誰を長松の。緑子ゆゑの住居かな」と述懐の(「サシ」)を謡うが、当然ながら今回は省いた。

月若の妹であるが、原設定では月若の姉である。が、今回動めた女兒は月若を演じた男児より年少であったから、この実年齢に合わせて変更、齟齬がないよう詞章の細部を調整した。本来であれば姉にふさわしい子方を探すべきであるけれども、いっぽうこの能では、妹と見たほうが情が湧くということもあり、一長一短があるだろう。子方払底の折から、

こうした臨機の設定は、キチンと考えた末のことならば、むしろ推奨すべきではないかと思う。

初同(最初の地謡部分)のうちにシテと妹は位置を入れ替え、二ノ松で三人相寄り、「親子ならでは」でシテが両手を伸ばし二人の子を擁してまとまって下居、母性の暖かさや団欒の心を見せる。直井の下人に呼び出された月若が後座にクツログと、シテはそれを見送る心でツメ足(こうした細部の演技が利かないと、こうした義理能Ⅱ人情劇を扱った能作品は面白くない)、妹を先立てて中入する。

このあと後見によって雪持竹の作り物が舞台に持ち出される。畳一畳分ほどの台枠に笹竹を幾本か立て雪綿で覆い、青竹の垣で囲った、この能独自の風情ある作り物である。これを通常は舞台正面、客席に最も近い舞台端に置くが、今回は舞台正面奥、囃子方の前に変えた。役者の演技空間を広く取るためと、後述するように月若蘇生の場の効果のためである。

継母が苛立ち、月若に棹竹(他流は笹竹)を押し付けて退場。この雪を払わせる件で、通常では継母が月若の小袖を剥ぎ取って下着姿にするのだが、今回はこれを止めた。小袖を剥ぎ取っては、いかにも「凍死せよ」といわんばかりの殺意が泛ぶ。これは避けたい。継母は善人ではないかもしれないが、極悪人でもない。これが王朝物語以来、古浄瑠璃にもよくある、「自らの腹を痛めた実子の将来を有利ならしめるため継子を虐待する」のであれば、一思いに殺してしまおうという動機も首肯し得るかもしれないが、この能にそうした設定はなされていない。ドラマの自然さを考慮するに、やはりここは「継母の過失の結果の事故死」としたい。

その凍死の場で、子方は舞台上に直接横たわり、後見が上に白練(純白

綾織の小袖)を被せるのが常の型である。今回はそうせず、子方自ら扇を舞台正面端に置き切戸口から中入、入れ替わりに後見が出て屍骸を示す小さな白練を出シ小袖に持ち出し、その上に扇を置き直す処置を採った。常だと後場の蘇生の件で子方がムクリと起き上がり、滑稽の感が湧く。これを避けるのが第一。子方が舞台に横たわり上に小袖を被せる処理は(谷行)にも見られるが、伎楽鬼神が登場して小袖(そこでは土砂を示す)を剥ぎ飛ばす勇壮な型を見せる(谷行)だと、奇蹟の実現が視覚化されるので、滑稽感は無であるが、(竹雪)では奇蹟を起こす竹林の七賢は出ず地謡に謡われるだけなので、いかにもただ一人寝起きたように見えるのだ。同時に、作り物の蔭から立ち出たほうが「奇蹟によって再び立つ」意外性が顕在化すると考えた。もちろん切戸口とは、能舞台で死したものが舞台進行の中で退場するのに使用されるのが決まりであるから、ここではその意味に従った。

後シテの出の段は、詞章に大きく手を加えた。後掲に詳細は譲りここで簡単に述べるならば、「一声」の謡のあと、「忘れて年を経る雪の(小車のわが姿)を削除し地謡「慣はぬ業を菅蓑や」に繋げ、「まづ笠の雪を払はん」の返シ句から「子の分れ路を悲しみて」に飛び、その間「暁梁王の(今われは引き換へて)も削除。こうして記すと煩雑だが、残した部分は存外うまく行文が成り立っている。ここで常だと、雪掻きのエブリを持ったシテがわが子の屍骸を探りつつ雪を掻く型をするのが見どころになるのだが、これは見た目の風情本位であって、「眼前わが子が雪に埋もれているというのに何を風流めかして」と反感を抱くのが劇能を見る側として正直な感想であろうから、この部分を極力切り詰めたのである。もっとも、文学的情緒は別物で、これまた能の彩りであり、あまり性急な省筆は試みなかった。型の見せどころとして、短い(クセ)

を舞うことも常の型の通り残した。また、「すはや死骸の見えたるは」で雪を掻く型は劇的頂点として大切だから、ここは風情本位で掻いてみせる前段とは違い、省かずしっかり演じてもらった。

最後の蘇生の中では、地謡「虚空に聲ありて」のあと、先述の削除部分から「かの唐土の孟宗は。親のため雪を分け箒を儲けけり」と一部を変えてここに補入し「竹林の七賢」に続けた。原詞章だとこのあたりの展開が速すぎて観客の耳にメッセージが充分伝わらない。そうなる奇蹟の顕現が認識されず、子方の蘇生がいかにも取って付けたように見える。幾分かでもそうなるのを防ぐ意図である。二十四孝の孟宗と、竹林の七賢と、説話世界は異なっても同じく竹によって連想される著名な唐人を併置し、古人の起こす靈験の印象を強めた。

なお、孟宗が孝子の代表として挙げられているのは当然として、竹林の七賢を神として扱うのはいかにも苦しく、しかも実際には登場しないのだから、その点にこの能最大の弱点がある。ひとつは詞章の補綴で幾分か補ったつもりだが、あとは役者の演技に拠る以外ない。ここで宝生閑のワキが舞台正面上方をキッと見上げた面構えが美事であった。シテも同様の演技で同方向を見据え、この二人によって「虚空に聲ありて」を実感させたのは偉い。こうした演技意識の共有が、常の能ではなかなか見られないのが実情なのである。

切戸口から出た月若が、ここで作り物を回り込むようにしてその前に立つと、後見が出て舞台端の出シ小袖を引く。前後するが、子方の扇は(クセ)の最後でシテが拾い上げ、わが子の遺品の心で大切に持っているが、シテは舞台上に下居のまま蘇生した子方に向き、招キ扇で歓喜の心を示す。

末尾では節付に音楽処理を加えた。すなわち、「かくて親子に合竹の

「もとの如くに榮えけり」までのリズム構成を変え、平ノリから大ノリとし、再び「二世安楽」で平ノリに戻した。末尾部前半を大ノリに変えたのは、世阿弥原作「花筐」の観世長俊改訂現行形に倣ったわけではないが、大ノリは華やかな効果があるから、劇展開に無理の続くこの能の最後をせめても盛り上げるためである。平ノリに戻ったところ「二世」の詞章で文字どおりシテとワキがシカと向き合って夫婦「二世」の縁の復活の心を示す。この演技も大切である。子方二人を先立ててシテは幕に入り、ワキが留拍子を踏んで納めた。

以上、実演所要時間は六十分で、展開の変化に富むだけに冗長の感はなく、観客のウケも上々だった。シテ・塩津哲生氏、ワキ・室生閑氏、それぞれ現能界きっての実力者の好演を軸に、囃子方（笛・松田弘之、小鼓・森澤勇司、大鼓・柿原崇志）と地謡（地頭・友枝昭世、副地頭・香川靖嗣）の諸氏の引き締まった力演が、この准一級作品の再考上演に大きな支えとなった。

能の世界の中で、義理能の価値は低く見られがちである。今回の上演は東京ではなく遠隔地での試演ということもあり、一回限りで終わる可能性が高いのだが、こうした見直し作業が今後も着実になされることによって、非名作の名の下に埋もれている能のいくつかが光を浴び、新たな価値を見出されることになれば、現在の能全体のヴォリュームが増す結果になるであろう。今後も心ある人たちとともに、こうした作業は継続してゆきたいと考える次第である。



喜多流 能「竹雪」 改訂試演版詞章

◆登場人物

シテ・直井の先妻（月若の実母）

子方・月若（直井の嫡子）

子方・月若の妹姫

ワキ・直井左衛門（月若の父）

アイ・直井の後妻（月若の継母）

アイ・直井家の下人（左衛門の従者）

※詞章のうち、「」内は囃子事の名称、「〔〕」内は小段名を示す。

1【直井の左衛門は寺に参籠のため、後妻に留守を任せる。】

〔名ノリ笛〕

〔名ノリ〕

直井 これは越後の国の住人。直井の左衛門と申す者にて候。さてもそれがし妻を持ちて候ふが。かりそめながら離別仕り。あたり近き長松と申す所に置きて候。かの者に二人の子御座候ひ。姫をば長松の母に添へ置き。月若をばそれがし一跡を譲り申さんため。この屋の内に置きて候。かやうに候ふ程に。初めて妻を語り申さ候。またそれがしは宿願のこと候間。程近き所に参籠仕り候はんずる間。月若がことを申し置かばやと存じ候。

〔問答〕

直井 如何に渡り候ふか。

後妻 何事にて候ふぞ。

直井 さん候ただ今呼び出す申すこと余の儀にあらず。それがしは宿願のこと候ふ程に。二三日の間物詣仕り候べし。その留守のうち月若をよくだはりて賜はり候へ。またいつもこの頃は大雪降り積もり候へば。

あたりの竹の損じ候。殊にこのほどは雪気になりて候。自然雪降り候はば。召使の者ともに仰せ付けられ竹の雪を払はせられ候へ。

後妻 何と御物詣と候ふや。めでたうやがて御下向候へ。また竹の雪のことは心得申し候。また月若殿のことよくよく労はれ仰せられ候。あら今めかしや候。いづ方への御留守にてもよく労はらぬことの候ふか。

直井 いや幼き者のことにて候ふ程にかやうに申し候。さらばやがて下向申し候べし。

2 【後妻の邪推と立腹。月若は失踪の決意を秘め長松に赴き、実母と妹に対面。】

〔問答〕

後妻 いかにも月若。父御は物詣とて御出で候。御留守の間に月若をよくよく労はれと仰せ置かれて候。これは今めかしきことを仰せ候。いかさまおことは殿へわらはが悪く当たるなどと告口をしてあるな。あら憎や憎や腹立や。

月若 げにや世の中に月若ほど。果報なき者よもあらじ。明暮思ひを信濃なる秩父の山。秋果てぬれば杵の森の。頼む方なくなり果てぬ。ただ長松におはします。母と妹に暇を乞ひ。いづ方へも行かばやと思ひ候。いかに月若が参りて候。

先妻 なに月若と申すか。嬉しと来りたるや。まづこなたへわたり候へ。人あまた連れて来りたるか。

月若 いや一人参りて候。

先妻 あら心もとなや。はや日の暮れて候に何と一人は来りたるぞ。

月若 さん候ただ今参ることは継母御の。

先妻 ああ暫く。名のらずはいかゞそれとも夕暮の。面影変る。月若か

な。あはれやげにわが添ひたりし時は。さこそもてなしかしづきしに。梓弓やがていつしか引変へて。身に着る衣はただ鶉の。所々も続かねば。何ともさらに木綿垂の肩にも掛るべくもなし。花こそ綻びたるをば愛すれ。芭蕉葉こそ破れたるは風情あれ。

〔下歌〕

地謡 いづくに風の溜りつゝ。寒を防ぎけるらん。

〔上歌〕

地謡 短夜の夢かや見れば驚くは。夢かや見れば驚くは。山田の鹿の如くなる臥所荒れたつ叢に。尋ねて来る志。親子ならでは。かくあらじ親子ならではかくあらじ。

3 【本宅の継母が月若を呼ぶ使者を立てる。】

〔問答〕

後妻 あら不思議や。月若が見え候はぬぞや。いかに誰かある。

下人 御前に候。

後妻 月若はいづくへ行きであるぞ。

下人 さらに存ぜず候。

後妻 いやいや推量して候。先にちと言ひごとをしてあれば心にかけて。例の長松の母の方へ告口しに行きてあるな。あら憎や。ただ今父御の御帰りがつて召すと申して連れて来り候へ。

下人 畏つて候。いかに申し候。殿の御帰りがつて月若殿を召され候。

急いで御帰り候へ。

先妻 なに父御の召され候ふとや。あら悲しやたまたま来りたるものを。さりながら召にて候はばとく参りて。またこの程に來りて母を慰め候へ。

4 【実母、心を残しつつ月若と別れる。月若は継母から咎められ、罰として竹の雪を払わされる。】

〔問答〕

下人 いかにも申し候。月若殿を御供申して参りて候。

後妻 いかにも月若。さればこそまた長松に行きて告口してあるな。父の仰せ置かれて候。雪降らば四壁の竹の雪を払はせよと仰せ候ふが。ことのほか雪降りて候ふ程に。急いで竹の雪を払ひ候へ。

〔上歌〕

月若 さりとは払はでかくてあるならば。

地謡 払はでかくてあるならば。われのみならず。母上も妹も思は長松の風。身にしむばかり更くる夜の。雪寒うして払ひかね。帰らんとすれば門をさす。明けよと叩けど音もせず。あら寒や堪へ難や。月若助けよ。げにや無常の荒き風。憂き身ばかりつらきかなと。思ふかひなき月若は終に空しくなりにけり終にむなしくなりにけり。

5 【月若、凍死した態にて切戸口より退場。凶報、長松に至る。】

〔立チシヤベリ〕

下人 なにと申すぞ。月若殿雪に埋もれて空しくなり給ひたると申すか。あら痛はしの御事や候。さこそ長松に御座候ふ母御の御歎き候はんずらん。やがてこの由を長松に申し候ふべし。いかに申し候。月若殿竹の雪に埋もれて空しく御なり候。

6 【実母と妹姫、月若の遺骸を収容に雪中に出で立つ。】

〔一声〕

〔一声〕

先妻 子を思ふ。身を白雪のふるまひは。

先妻・妹姫 降るに帰らぬ。心かな。

妹姫 花は根に。鳥は古巢に帰れども。

先妻 われは再びこの道に。帰らんことも片糸の。

先妻・妹姫 一筋にただ思ひ切り。

〔上歌〕

地謡 習はぬ業を菅蓑は。習はぬ業を菅蓑は。寒風も溜まらず。いつを呉山にあらねども。笠の雪の重さよ老の白髪となりやせん戴く雪を払はんまづ笠の雪を払はん。

7 【実母、エブリを手に、月若を埋めた白雪を掻き退ける。母と妹の悲嘆。】

〔歌〕

地謡 子の別路を悲みて。竹の雪を掻き除くる。わが子の死骸あらば孟宗には変りたり。嬉しからずの雪の中や。

〔クセ〕

地謡 思ひの多き年月も。はや呉竹の窓の雪夜学の人の燈火も。払はばやがて消えやせん。谷を隔つる山鳥の。尾を踏む峰の竹には虎や住むらん恐ろしや。世を鶯の声立て煙は竹を白雪の明石といへば須磨の浦の。海人の焼くなる塩やらん。

〔ロンギ〕

地謡 空に知られて木の下に。降る雪は狼藉か。落花か。

先妻 母は泣く泣く雪を掻けば。

妹姫 われは父御を恨みて人知れぬ涙堰きあへず。

地謡 すはや死骸の見たるは。

先妻 いかにも月若母ぞかし。

妹姫 兄上こそと。

地謡 呼べども叫べども。答ふる声のなどなきぞ。消えよと思ふ。雪は積りて月若が別れを何に譬へなん別れを何にたとへなん。

8 【直井、帰宅して月若の死を知る。妹姫と先妻の抗議。直井の後悔。】

〔問答〕

直井 参籠の日数はや明きて候間。下向仕り候。あら不思議や。それがしが四壁に当って人の嘆く声の聞え候ふはいかに。あら心もとなや候。これは疑ふ所もなくそれがしが四壁の竹の中にて候。やがて直に立ち越え尋ねばやと存じ候。や。さればこそ。やあ姫これは何と申したることぞ。

妹姫 さん候月若御は長松へ来り給ひしを。父御の召とて帰りに候へば。竹の雪を払へと仰せ候とて。払ひて候へばもとより衣は一重なり。寒風に責められて空しくなりて候ふを。情ある人のこの由をかくと申し候ふ程に。母上これまで御出でにて候。いづれも親にてましますも。母御はこれほど悲み給ふに。父御前は子をば思ひ給はぬぞや。継母御をば恨むまじ。ただ父御こそ恨めしう候へ。

直井 や。言語道断の子細にて候ものかな。総じて月若に竹の雪を払へと申したることはゆめゆめなきことにて候ぞとよ。定めて人の教戒にてぞ候ふらん。これと申すにとにかくに。ただそれがしが科に候へば。返す返すも面目なうこそ候へ。

先妻 身は梁の燕の習ひ。栖み妬き事を聞きながら。さまをも今まで交

へざるは。かれを思ふゆゑなるに。そも継母はいかなれば。この月若をば殺しけん。よその歎きは一旦の思ひ。ただ愛き身ひ独りの歎きぞかし。命惜しとも思はず。

直井 身は白雪と消えばやな。

〔下歌〕

地謡 理や面目なや思はぬほかの歎きかな。

9 【両親の悲嘆。竹林の七賢の靈験により月若蘇生、切戸口から再び立ち出る。】

〔上歌〕

地謡 二人の親の悲しみの。二人の親の悲しみの。不思議なる憐みにや。虚空に声ありて。かの唐土の孟宗は親のため雪を分け笋を儲けけり。竹林の七賢竹ゆゑ消ゆる緑子を。また再び返すなりと。告げ給ふ御声より。月若生き返り喜びは日々に添ふ。

10 【直井と先妻の復縁。子孫繁盛の大団円。】

〔ノリ地〕

地謡 かくて親子に合竹の。かくて親子に合竹の。世を古里を改めて。もとの如くに榮えけり。

〔歌〕

地謡 二世安楽の縁深き。親子の道ぞありがたき親子の道ぞありがたき。